「福祉をもっと明るくプラスに！」実践ポイント その①

まず先生と社協職員の思いを共有しよう！

福祉教育の実践では、体験することが目的ではなく、体験を通して「ふだんのくらしのしあわせ」とは何かについて学ぶことが目的です。

具体的な福祉教育プログラムを考える前に、まずは、「子どもたちにどのような力を身に付けさせたいか」という先生の思いと、「どのような力や視点を身に付けた子どもに育ってほしいか（目指す子ども像）」という社協職員の思いを共有することから始めてみてはいかがでしょうか？

同じプログラム内容でも、学校と社協のそれぞれの思いによって、子どもたちへの問いかけや振り返りの視点が変わります。教育振興基本計画や子どもたちの置かれている状況、地域の社会資源等も参考に、具体的に話し合うことで、より効果的な福祉教育の実践につながります。

福祉教育を通じて、育みたい子どもの資質能力

～福祉教育ガイドブック作成検討会で挙がった参考例～

「探究力」
- 何のために福祉を学ぶのか知る力
- 地域の課題を見つけ、行動する力
- 地域にはどういう人が住んでいるのか等、自分で調べる力

「発信力」
- 困ったら「助けて」と言える（助けを求めることができる）力
- 気づいたことを伝えることができる力

「多様性・受容力」
- 自分とちがうことは何かを知る力
- みんなちがって、みんないいと違いを認め合う力
- 自分を含め、全ての人が福祉の当事者であることを理解する力

「自己認識力」
- 自分ごととして考える、自分にできることは何かを考える力
- 自分も社会をつくる一員であると認識する力
- 自分も福祉の対象（特別な人のためだけではない）と認識する力

「知識力」
- 困りごとに対する相談先等の情報を具体的に知る力

※その他にも、「共感力」や「行動力」などさまざまあります。

それぞれの立場で考えて記述しましょう　話し合いにご活用ください

【 先 生 向 け 】子どもたちに、福祉教育を通じてどのような力を身に付けさせたいですか？
【社協職員向け】地域共生社会の実現のためにどのような力や視点を身に付けた子どもに成長してほしいですか？
福祉のどのような魅力を伝えたいですか？

【先生の思い、最近気になる子どもの言動、子どもたちの置かれている状況など】	【社協職員の思い、地域の社会資源、状況、地域生活課題など】
【社会や教育制度の動向、学校や教育委員会の考えなど】	【社会福祉制度やサービスの動向、地域福祉活動計画の方針、内容など】

今回の福祉教育を通じて、育みたい子どもの資質能力

コラム　福祉教育はどうやって生まれた？

福祉教育は、1947（昭和22）年に戦後復興として始まった「共同募金運動」により、社会事業や社会福祉について教える実践が、その起源のひとつだとされています。このように、戦後初期から、子どもたちの健全育成を図る取り組みとして、社会事業の教育を通した働きかけがありました。

しかし、本格的に「福祉教育」として、計画的・組織的に取り組みが始まったのは、1970年代とされています。これは、1960年代後半からの高度経済成長による都市化や核家族化、過疎化等の急激な進展が影響しています。従来は、家庭や地域が担っていた福祉教育機能が弱体化し、福祉（人がどう生きていくか、老いるとはどういうことなのか、人と人とはどのように関わっていけばよいのか）を学校の中で教えていく必要性を感じた先生たちの取り組みから始まったとされています。

参考　・「福祉教育の理論と実践方法～共に生きる力を育むために～」（全社協・2022年3月）
・「共に生きること 共に学びあうこと」（原田正樹・2009年11月）

「福祉をもっと明るくプラスに！」実践ポイント その②

福祉教育実践の全体の流れを意識しよう！

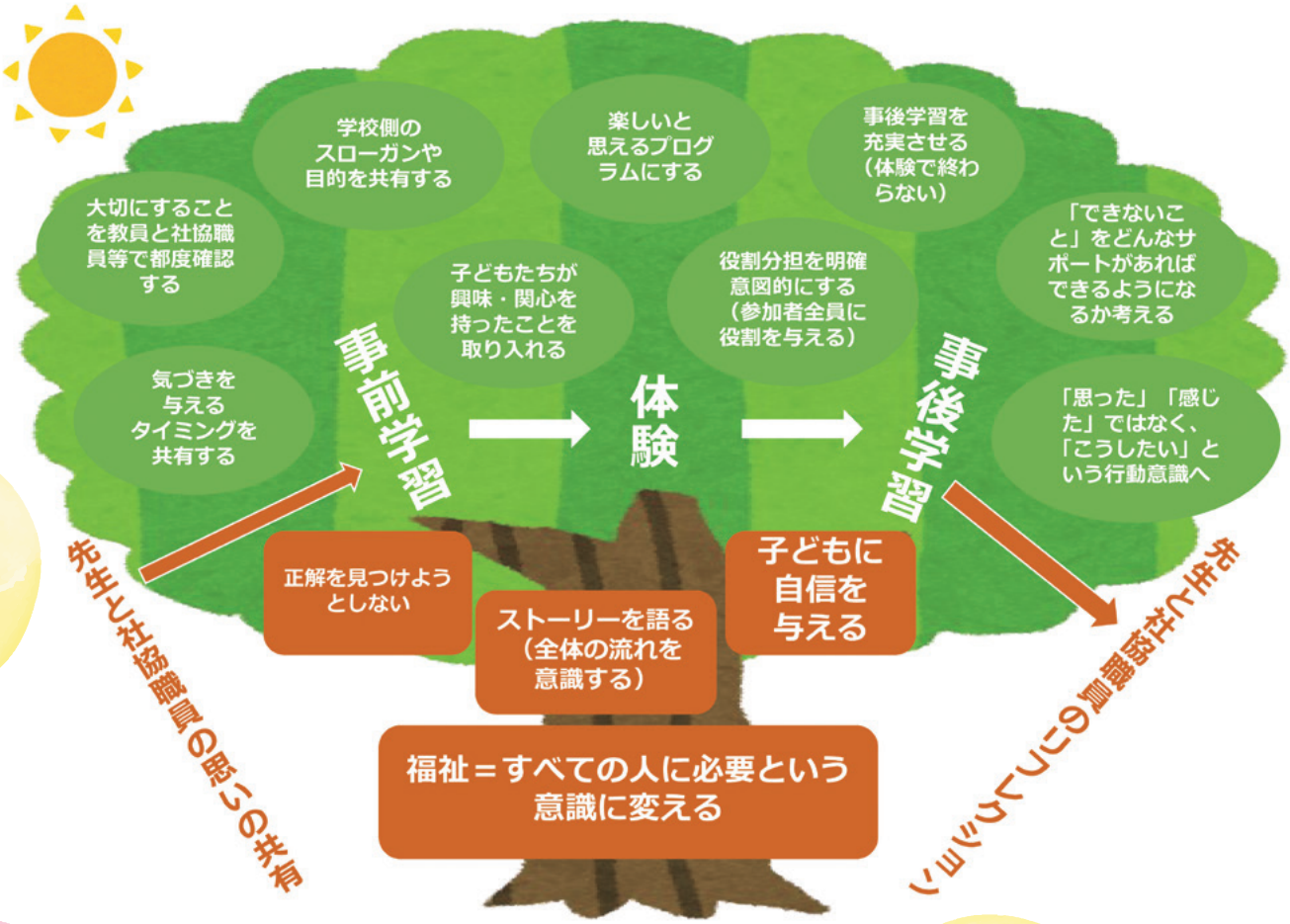
福祉教育の実践は、基本的に「事前学習→体験→事後学習」の3段階で構成されます。全体の流れを意識しながら、6ページの「今回の福祉教育を通じて、育みたい子どもの資質能力」を伝えることができているかどうか「事前学習→体験→事後学習」の前後で確認しながら取り組んでみてはいかがでしょうか？

特に、体験後に、子どもたちに、「かわいそう」や「大変そう」「こうなりたくない」のようなネガティブな印象や先入観が形成されないよう、**事後学習で適切なリフレクション（内省）を行い、正しい障害理解や、意識変容を促すことが非常に重要**です。

リフレクション（内省）とは、失敗や間違いを振り返り、改善することを目的とした「反省」や単なる「振り返り」ではありません。行動や言動（失敗や間違い、成功体験等）の全てを対象として、客観的にじっくりと考察することです。主観を挟まず、客観的に振り返ることで、成功の理由や修正すべき改善点などを導き出す働きかけのことです。

先生と社協職員が福祉教育を進めるにあたってのポイント例

～福祉教育ガイドブック作成検討会で挙がった参考例～



《吉備中央町社協における全体の流れ》

吉備中央町社会福祉協議会では、「共にふくしを育んでいきたい」という思いから福祉共育として推進しています。「福祉教育は共生社会を築く手段」として捉え、打合せ段階からの共同実践を意識しています。

吉備中央町社会福祉協議会 地域福祉係 福祉活動専門員　三城 智也 さん

それぞれの立場で考えて記述しましょう　話し合いにご活用ください

福祉教育を企画・実施する上で、特に押さえたい、心がけたいポイントは何ですか？

【事前学習】 → 【体験】 → 【事後学習】

コラム　福祉教育の体験と職場体験、夏ボラの違いって？

福祉教育での「体験」を通じた学びとよく似た活動に、（福祉）職場体験や夏のボランティア体験事業（夏ボラ）があります。これらは「体験」を通じて、福祉の仕事やボランティアとは何かを学ぶことが目的です。

一方で、福祉教育での「体験」は、福祉（ふだんのくらしのしあわせ）とはどういうことなのかや「ともに生きることの大切さ」について体験を通じて学ぼうとする取り組みです。手段としての「体験」は同じでも、それぞれの目的は異なります。なお、夏ボラは福祉教育的要素も含まれており、参加を通じて福祉の価値や他者とのかかわりについて学ぶ機会にもなっています。

「福祉をもっと明るくプラスに！」実践ポイント その③

多様なコンテンツで プログラムを充実させよう！

本ガイドブックでは、各プログラムを構成する一つひとつの要素を「コンテンツ」と呼んでいます。今よりも「**福祉をもっと明るくプラスに！**」伝えるためには、子どもたちの興味や関心、発達段階等に応じて、子ども自身が、自ら楽しく学び、考え、行動したくなるような事前学習プログラム・体験プログラム・事後学習プログラムを展開することが大切です。

全てを先生や社協職員が行うのではなく、学校や地域の実態に合わせて、社協の多様なネットワークや地域の資源を活かしながら、複数のコンテンツを組み合わせ、プログラムの充実を図ってみてはいかがでしょうか？

ここでも、体験すること自体が目的とならないよう、6ページの「今回の福祉教育を通じて、育みたい子どもの資質能力」を意識してみてください。

子どもたちの「○○力」を高めることをねらいとしたコンテンツ参考例

～県内の市町村社協 福祉教育・ボランティア担当者から挙がった 事前学習/体験/事後学習プログラムでの参考例～

子どもたちの「探究力」を高めるコンテンツ（例）

- 自分の住んでいる地区の紹介を考える
- 地域のお祭りの歴史や意味を考える
- 地域のお祭りなどに福祉体験ブースを設け、運営する
- 地域のボランティアと交流する
- 地域の支え合いマップ（ハザードマップ）を作成する
- 地域の認知症カフェに参加する

子どもたちの「発信力」を高めるコンテンツ（例）

- 福祉新聞を作成、発行する
- 福祉教育で学んだ内容を保護者や地域の人、下級生に伝える

子どもたちの「多様性・受容力」を高めるコンテンツ（例）

- 友だちのことを知る（みんなちがって、みんないいことを学ぶ）
- 福祉施設や企業等とのイベントで交流する
- ボランティア活動をしている人や団体の思いや体験談を聞く
- 福祉施設や福祉事業所等を見学する
- 福祉用具や車いす等を作っている人や企業の話を聞く
- 障害者（パラ）スポーツをやってみる
- コミュニティカフェを学校で開催し、地域のいろいろな人と交流する

それぞれの立場で考えて記述しましょう　話し合いにご活用ください

6ページを念頭に、どのようなコンテンツや、ちょっとした工夫があれば、子どもたちが楽しく主体的に学べると思いますか？

【事前学習】 → 【体験】